

ニエースの 交差点

—茨城県—

『今後のインフラ維持管理』

全国的に地方公共団体の職員不足や財政難が課題となる中、解決策としてEBPM（エビデンス・ベースド・ポリシー・メイキング）が注目されている。EBPMとは、維持管理費用などの客観的な根拠に基づき政策を立案すること。EBPMによる道路と下水道の一元的な維持管理を視野に、牛久市ではDXを活用したインフラメンテナンスサイクルの構築に向けた実証を行っている。

牛久市が管理する道路総延

長は774km、下水道の総延長が510km。現在の道路パトロールは幹線道路を中心に、技術系職員が目視で実施してきた。点検が行き届かない生活道路などでは、道路の損傷や樹木の張り出しによる事故が発生している状況だ。

下水道についてはストックマネジメントに基づき、カメラ調査を実施している。市の担当者は「これまでしらみつぶしに行っていた調査の効率化が不可欠」と話す。

市は東北大学インフラ・マ

ネジメント研究センター、ニチレキの協力のもと、スマートフォンによる道路点検DXシステム「GLOCAL-EYEZ」を活用した実証を2月18日から開始した。

取り組み内容は、道路パトロール車両に装着したスマー

で解析できる道路異状は、路面のひび割れやわだち掘れ、ポットホール、段差、区画線のかすれ、樹木の越境、マンホール蓋による段差など。AIが損傷のランク付けやMC I、IRIといった舗装の管理指標の算出を行う。目視に

1人でも点検ができるため、省人化や経費削減にもつながると考えられる。

さらに、路面データと下水道管路カメラ調査データをリンクさせる取り組みを実施。路面上の違和感と管路損傷の位置データを整合させ、空洞

タの活用につながれば」と、今後の展望を語っている。

効率的かつ有効な維持管理には、合理的な修繕計画の策定が欠かせない。今後、システムの高度化が進めば、より高い水準で道路環境を維持管理できる可能性を秘めていると言えるだろう。

GLOCAL-EYEZ実証

道路・下水道管理の一元化

トフォンで舗装道路を撮影し、AI解析による損傷箇所の確認や応急対応、修繕計画（優先度設定）に活用するもの。現在はデータ収集が完了し、分析・検討を進めている。

「GLOCAL-EYEZ」

よる見落としがなく、計測も不要で、誰でも点検ができることが最大の特徴。

このため、防犯パトロール車など複数台でデータを収集し、より広範囲かつ高頻度の点検が可能となることが期待される。専門性を必要とせず

の「あたりづけ」を試みるもの。地中の空洞に起因する路面の違和感を抽出できれば、道路陥没の予兆を早期に発見できるようになるという。

市の担当者は「道路と下水道の点検データの一元化により、重点的な調査や累積デー



データ取得のようす